八代集抄

後拾遺四五六

十二

特別
イ4
3163
104(12)

わか恋乃かすを
くもりふたかり路
雨れ粒のことくと
いふ心なるへし
曇塞（クモリフタカリ）雨粒のこと
うちかへし君そ
一たひ忘れたる人
まれにおもひ出て
又おもひかへるき
りハ早（ハヤ）心かはりとも
やまとんとのみを

後撰和歌集巻第十二

恋哥四

女につかはしける　　敏行朝臣

わかこひのかすをかそへはあまの原
くもりふたかりふる雨のこと

わすれはへりける女をおもひ出てつか
はしける　　読人不知

うちかへし君そこひしき古への
やまとなてしこいろやかはれる

貴
14
3163
104(12)

投子ふつくしてよめり
左今ハ何ふ立て今も
そこが山の揺保
をはるやすと投子
山ひこの声かさて
山彦ハ声を立ての秋
羽ゝ子をとひ出
をてよ年ふ情家
し投子ひ知ぬ人とし
ハゆ知るへりしとも
筆もかる浦にハ
かくもひかりし心
をるへし
みもかりてめしなき
也るくハあるとく

女のきたる　枇杷左大臣（仲平公）
山ひこの声まてしも年ハへぬ
わかおもひをもしらぬ人まけ
男よりおもわるゝ人をおもひて
ほりつくる　紀友則
筆もかる浦にハおもねとわすれこの
そこねもしてすゝけるこゝろなる
ぬる筆ひかれハ又思ひねく
ほりつくる
みるもあくせも見え海乃なみまに出て

このよ心を深み海る
よろへて松けり見る
あまき心を海松布を
き浪をよそて我も又
ぬるすきなき浦さ
うちすみ此浦の
うかすみの浦ハ渡の
浦にゆかる人乃
立まるとえけりも
あゝゆりて又来るさ
まを恨みし許りハれ之
せきこえかはの
関清水森近
にし逢坂をこえて
逢見すとも思ひ別

かゝくもとうみはるの那
あまりみて待たるおとこうり
よみ人しらす
うちすみ此浦乃ましらすみ立いて
よるみるも我くかゝるまちわり
なひきかくも待たる人乃おもかれ
かさへすまりかれハ
せきこえてあふ川乃森ハおもハれ
清みのりえてし鏡をわすれる
よし

しるしをこゝろえよ
ちかけれどとよめるハ
近き事さへなりかね
よそに見ておハね侍
されハ今近江ゆきて
ハ添坂の関のあなた
ぞと思ひてあきらめんと
よめるなるへし
いまはとてこずゑに
今ハとて事をと
からでこそ男の袋
ぬかれハせしなり
とりてはくこね
今見んとハおもはさ
ざりしとの心也

ちかけれどなにかはしるし逢坂乃
せき乃あなたとおもひたえなん
はしきなりふるなきよにとも
まつはやらくかうゞあとかへ（出家）
ちりはてゝ　平なかきむすめ（中興）
いまはとてこずゑにかゝるうつせみの
からを見んとはおもはざりしを
かへし　源巨城（ノヲ中将）
わすられて身をうつせみのから衣
かへすはつらきこゝろなりけり

わすらるゝ男をうら婦
ミてかくよみたる吾妻
こゝろていと心ハ
かけにだに見てやや
鏡乃新しきも涙
き人の形のみえてや
すると頼みつるか悲
しひなく恋をま
ますかゞみハそへたり
女乃ぬすまれ家より
まかりて　女のすむ
田舎の家より男の
て門できてし
あしひき乃山田の
かはつハ男なり

ものいひける女乃かゞみをかりて
かへすとて　よみ人しらず
かけにだに見えもやするとたのみつる
かひなくこひをますかゞみかな
男乃物などいひ侍りける女の
ぬすみの乃家よりまかりてくるき
たれとえきてはらみすやそえん
かくも侍らざりければ田の
ほとりにかはつの鳴けるをきゝて
あしひき乃山田のうつゝ打侘く

しかけてゑのかみかけ
かくす鹿子るし心を
うき信なりて也
納むすく帰る事
と誰よりひとりけり
遣しつらひとも字
古今集にあれ也
よも松ハはなるか也
そまらひハおハさうね
やハ我むすめを也
ひとりかひく遣んせ
よねかれともかす
母かゝひしよねハ
おれと遣らへて
ひかくと待ての子

ひとりかへる乃ねをそなきぬる

みはかりける女乃母に遣して

こひしどハ何あるとこゝろ字

それハ侍りける

よそにハあれどおもふすき宮の上の

まかそくとをふるハひとし

女うはりける

猪太政大臣

ひさすまのひをそねるおもふハ

よのやまりゆるしきまて

年ふる歌をよめる
遣ゆつさハ宮の御
也奥義云古今に有お
まハ宮も松はまる
ひさすふりとひそ

返し　　伊勢

わかやとゝたのむよしのに君しいらハ

おなしかさしをさしこそハせめ

我を一向りいとひすてすハ吉野山よりへくゆかしと思ひてね女
とおもんとて吉野ハ奥深き山にて皆かり隠家となりし次の句
乃語り来し
わかやとゝたのむよしのゝ君とハ山のおくふかくゆきか（皆古今の心也）
それハ山乃おくより宿もると云古今の心を申あけきハ吉
野よりかれんと云おハり君もいへハかさしと云ハ山より入余など
かりておよそて鹿ふも人にも見へしとかまふる事をすしか
さらてもおもひよさるんとよめり或抄云ふさしをさん
と云同じく宗乃居へと
待てめんとよし翳弄

とハ志るへし　読人不知　よよ人を

それなる袖とのこ
心ハ涙しみをうけたる
り袖の裏の様も
かはるにや
それなる哥ハみえて
泪の色紅になりかわると
目ためしハ彼なん
とかれしふ今者の
上なる物をとし
あらはれてしこゝハ
しハ物ふるし縁葉
の緑なするごとく紅
深もなくして事ハ
緑の袖も紅やせんと
や六位なる人をいふ

それまでは袖をのみこそ深くそめ
きみをうらむるなみだはくれなゐ

流出なくてなる人のよみける

それなる哥なみだうつると涙しをる
あといふるとられおもひなん

かへし

ねかりなみたしてハみなかなる
うきしとみれと見えしはかなき
あひすまくなる人（ねたりし別のなみたハ）心もありて別
なげゝるか年月をつくして逢見ん

哥こゝろやし
いにしへ乃野中の志みづ
童蒙抄云野中清水津
國にあり又播磨にあり
ありて　愚案此哥ハ恋に
もとの心をしる人ぞくむ
とよまれし後久しく
なふをりへるもさびしく
むかしを忍び帰来
まみし泪もさしぐむと
あま雲乃よそにもといふ
心ハ涙し袖のぬるゝハ
そのひるまなきなるも
ゆかりもなくなりて
なきそ此雑をひけて

とつきて待たるゝ文を見出てよめる

いにしへ乃野中の志みづ見るからに
さしぐむものはなみだなりけり

おもふより待わびる男のもとにつかは
しける

あま雲乃よそにもなくゆるものを
袖のみぬれてなみだなりけり
かへさるゝとて男のこゝろかはれハ
ゆかりもなくてまかりし君こそハ
おもひそめ乃おもふハかりけり

也必まんと云ふ心の意ふ
とりふ小方遠への心をえ
てよめるなるへし
ときこえみさをのみ
ときりくなるふぬ也
まつりうて待名れ
みつき恋をまかり
こゝにあさるあ手の
濃さの中さる紅涙に
こと人をそて見せく云う
とも云ふ人の紅涙乃（あさき）
再多くも見ハ此世なり
も心要して此世の大
あはぬをかくいふるや
すみうしのきこしる

あひしりける人乃久しう
こさりけれハはゝりしける
こきをふともみめこらとハまつりとの
ひさしくきぬりこそあまとれ
さハ出しも　此哥伊勢集にあり
こさまける寿子との名もめひきさき
足すへき人乃これ世あらねハ
女乃きとりはかりしける
すみ乃まきにきゝするかきつ波
まくかけくもはなかゆるなる

席寄しきょする
ハ歳あまくあまも云く
みて云ハの心で
を乃江乃まちつら
往吉岡小近き所
らハ寿まつかけて
こと云る浪の科を読
わりまて知らきを近う
らねハ云を科ふ知とて
こひしへんとは心の
痴くの身なりん
こゆりふわりなる心の
とい我死ふその名も
知て忘れんと云とて
とりやとおもひそん

かへし　伊勢
をみ乃江のまちつらハ岸をねて
浪のよするゝよむつきをのを
はしかゝる人のうへにはつハ
しける

こひしなんといふ心乃わりなさを（きイ）
志ゐても志まへよわすれてなる
あし　縫太政大臣
とりやとおもひかへすをゝなすへ
かくするわれとなりかけるほと
伊勢集ニハくふとあり

わか逢見んとすらめや
と難むまてうかりも
よる命なれは歎を
あくにかゝるうち
に秋にう死をめとし
あみとしふかきこゝる
形見といふ物れと人
よそと見えぬとし所見
こそといわれたれし
いはなうへ見はなれのを
見くなくとるかひなき
よろひみ見てはとし
とふのところをきゝは
吉野とゆふる山下なる
物かくも遠のこゑて
あふねとなるくへし

題しらす　よみ人しらす

あみとふかすま見んゆる杉なるは
わすれつもかくまゝしものを
とくのみころききてふち立乃
やまとさへかりそね杉のくら　（あひたし杉の下露）

伊勢

秋霧乃はれてくもれはとめく
（男の歌を見てよめる返しはおもふことも）
いとゞしくれはこひさひかるらん
いまそといひかなしかれと
秋とてや宮はうつるか乃立ねらん

古今へ忠岑乃山下葉の
木のくれて此頃を見れ
秋こそや今はかきりの
人乃心の秋の今そ今そ
限りといふらん
とし夢乃立とらく

後撰集恋

おもひあへぬものあるらくに
心乃うちにこもれやあまたらん
かけ夢乃おもひ出ゝ宵ことに
つれなきをしのふそあはれなりける

ゝりおもひよあへぬはおもひ堪兼ぬる物もあつきと堪へかた物を　久へ
心根まゝそ　後撰諸本如此　但伊勢集にはおもひあへんとあり忘
は我を秋とて今はかきりといへるらんわれはおもひ堪ん物りかす
こし堪うく此うらんの思ありも　古今にひるはおもひあへとはれへしの絶
見し夢乃おもひ出ゝ　見し夢とは人よ逢知るやも宮の
中りおもひ出く御もいひ出ぬり間は知らくこゝろのとも

題しらす　よみ人しら

しら露乃おきて
しら露のはおきての　しら露乃おきてあひみぬ事よりは

枕頭におきゐて逢
見ぬ殺せんよりハ衣
あしきて待て着は
うたんとし古今ニも
せめて寂しき時ハうえ
むかしの衣をかへし
てうぬる
ことのちにそけりる物と
うけるハ身をさかの
心しき跡ハ知れぬ物
ありさいねさめよりふ
この跡ハ尋ても逢我
物ハ忘ぬねよ宿て也
小雅をも思知んとし
忘る身乃うちむる

さねくしはねなんとすらふ
人のとかはやはらしくる

ことのたまあけゆる物といはゝらう
おもひねさめてきくもしるらん
安乃ととは流らもしける

中納言　三条右大臣定方男
朝忠朝臣

志らなみ乃うち出る濱乃はまちとり
跡やたつぬる志るへなるらん
安りはかりける

参議　従四下玉淵子
大江朝綱朝臣

序辨に濱千鳥説
云ハ今つくらす又のす
ふらやし白波のうら
出るをいふも跡よりひ
なるすをとへてりや
わりやにてゐるをえらひ
序辨に大鏡八雲ホ抄
侍あるを正義云大鏡なる
きよわ陳ちりあるを
皆人乃運ぶ舟をみ運（ハコ）
早舟（ハヤフネ）に万葉にも詠し
ひとつよりおもひを極す
世の常にて人の心代りれ
ハたさして頼も一向に
えられわひえとし

おりふしにあをきこひしさや母乃
そやくもひとりおもひえてしりを
伊勢なん人のわすれまてなけき
侍よきてはへりける

ひとつよりおもひはつわひうかるらく
人乃こゝろをえれらよのはて

贈太政大臣　時平公

返し

よしはねの人の心をかくしこそねえ
なみのこれさひけれつきぬるを

伊勢

よのはかの人の心を
かゝすハよのつねなる
めとも我ハ末見えさる
またれハ歎き侍り
はりよのつねと世上を
見合すれても何かん
我ハはるひの歎きよ
浄蔵つき物をとこ
すみそめのくらまれ
墨染ハくらま枕詞也
たとる〳〵ハくらき所の
縁也浄蔵ゆかきかれ
りとの心ハ身を大和
物語ニはは安居通し
日をへても影に見ゆる

雲居寺浄蔵之元字大去秀
浄蔵くらま山へなんいるといひけ
れハ　平なかきかむすめ（中興近江守とも）

すみそめのくらま山にいる人ハ
たとる〳〵もかへりきなゝん

あひ志りて侍る人乃かれ〳〵
のこ見て侍れハ　伊勢

日をへてもかけに見ゆるハおちつる
はまきなかりしもとに越なりけり

わすとおもへおもしも時く神ひ侍（イ さり）
たる女に久しうとえす侍れハ

或抄云時しもいてても
親乃見ゆるかつき
なりしも猶ぬ思ひて
何となる思ひつゝハ流
らき我身猶猶返
ふるさと乃松とみわ
男乃下心猶ふと志て
愛せねると見ゆる
よしと　或説云松
乃下紅葉の色
ときわゐね松のみり
も下乃紅葉とこゆ
るハ我限ありき之ゆ
をゆるなれとと
なるのきりなき涼

よみ人志らす

ふるさと乃松をみかと見しことハ
志るさのとみちを志らぬなりけり

返し

ときわゝね松乃みとりもかきわかちきさ
おもひやりハ南をいろやをもゆりん

久かよしすゑりかなくさしへ
侍るる人りけりける

ふとり乃ちのきによをへて
かよふそうり乃えりにけるなれ

その詞ハうちよりし
て年をふる縁まて
うち連そひてし
江を渡りけるにてし
波のうへにのゝやそ
或ハ云ふ又ハあかうなと
うきさるりとなすし
らまさく年へさるを
おしやるハそれも物の
料まそてハあらし愚案
波の上に給やいしゆると
いふ爰の詞の波に覚
えたるといふなりし
いふ舟乃とりふると
古今にいはれすし

かへし

波乃うへにうかひや見ゆるあまの
うきさへ（みなんけ）ねんころハ救かそ
せうちこ流かりたる女乃こと
よわいま舟乃とりふすをみるよ
いひく結それハこの舟くいひわ
よわたるに程あひりきさたりき
結えれそ志りとおもとい（本ニ有ちりまてきたるとりふ外とこ）
本まハかくそといふわたるみるす
よ流かりける

あかれよる瀬との白波
よわうひとれハなう
この心浅さに志うりま
てといひ星もしま
舟のゆるこさく我も
さひしへてく行しを
り千川わきまえも
深きにも佐やとハえ
好との字我の深
きとも志くて元来
をゆくハ浮かうさ
稲舟ハ縁つうかこ
えなすきわよ出る
よりきこハ速く思ひ
て参りてしつひそかよ

あれよるせての志ら浪浅けれハ
とまるハおなしかつるあるへし

かへし　三条右大臣

わすれ川深きにはたゑといふ舟ねの
こころくもかつるあるかな
いと志のひくかくて人のやう、
りあるさまにみえしけれを

よみ人志らす

をはなすゝきほにいつるすゝき物を
まねきかきぬる秋のくせかる

離れてゆくまゝにまて
もらさき中よそや秋
風の吹くまゝにて花も
ちりきをと恨むや
まことさかし秋そ
秋はきまて人の心はよう
にありしとくまよ
うにうつさへ對して
いひく人の花秋の
うきてうとよめる也
きみをおもふ心ふかさは
我は秋まてよしに
あるまはおもふ君
をうふ心は秋のよの
ながきとらくかな

こゝろさしなかりける人よ
はかりける　中臣のむすめ
まことかし秋はきぬれとさし人の
こゝろはよそにうつりゆくらん

かへし

源是茂朝臣　（中納言　忠孝深氏）

きみをおもふ心のふかさは秋のよに
いつまさるとそしらるらん
あふをまつとしは人をいとふと志
のひくかへしひ待ゝるを長行
けふかへりぬるを人見くさく

かゝみ山あけてきつれは
秋霧のはけさやうらん
ことゝん枕詞来ゆて
きつるゆくよ名を
いなのと翁やさらん
とし近江こ名男と
うつく也鏡山近江
平中まれよ　希世太中兵
内苑頭　雅望王男
枝もらく人におくれて
よくひかの人乃名
ぬすもこゝと名神
我ぞも名将をらく
めのとへんとれく
ちへよかり

やきくれは香女乃ことゝり嫁り
ちゝりくる　坂上つねかげ（常景　長門守）
かゝみ山あけてきつれは秋霧乃
けさやよつしんのみてふ名は
何ひきりて待る女乃人よ何名
よち待くるまつりくる

平中れよの翁

枝もなく人におくれて堂前も
ねをくりのこせうへし我さぬ
人乃とゝよまりて待るかり

秋乃田のかりそめふし
かりそめにふしたるこ
とハしはしかりそれも
別にはわかさりし只
いたつらなすのこにいね
おもへる信さえ
せんかたもなりしとの心
を秋田をかりて稲を
積むやうにて詠し
秋風乃ふくにつけても
人乃折くあるを詠める
比秋風の吹て荻のう
はゝ我ゆて秋風
の吹につけても此人のと
はさるよ荻の葉ならハ

よるはいなれぬすのこよにかくありて
つかはしける　在原成國
（摂津守　正五位　伊豆守連堅）
秋乃田のかりそめふしもしてけるか
いたつらいねを何につまし
平かねきかやうやうかれかたになりに
けれはつかはしける

中務

秋風乃ふくにつけてもとはぬかな
荻乃葉ならはをとはしてまし
こ月をつゝくせうこと志侍る

あらく打流はる凡
情殺ある事とも
まちみてすてにいく世
君をまちていく世を
へ経ぬらん年月を
かさねみても涙
とこゑ年ゝハかをと
あかくにといひけてハ
嫁わたひもかけれそ
ふかるを中くにこい
みてハ送別ね服の
堪さき心を衣を掛
る身にかるうらむを
こそ根流れてよめる
うらむるはかけてこそ

人をまちける　よみ人志らす
まちみてといく世へぬらん年月乃
かるとこみもおつるなみた
世かはりける
あかくにといひけくハくるゝを
男かれぬとうらむるつる
返し
うらむともかけてこそ見れから衣
身なれぬれはふかねとそきく
人をはなりける

ふかねとハ大くるし
心ハよしく恨ても男
ミかへさじ暮られハ
家の古くなるもやと
無く急刹てかきまれ
ていろくよの盛も
さけよもかひなかり
心明く雅言を歌ひ
こぬ人をまつの契よ
まぬ人を待うくて
きえつるとハくゆる云
り消あまる風し出島
大和詞元良親王を
盛まて待つ世わり
きく乃花うつる色を

あけくれもかひなきわか世の中に
はかなくやしをおもひそめけん
わすれくさわか待たるおとこよ
ほかりける　承香殿（ショウキヤウデンノ）中納言

こぬ人をまつ乃契よする宵の
きえもせすこくゆるおもひ
世にまれ待まちたる女まつかりしたる
よみ人しらす（或本兵凡とも）
きく乃花うつろふいろをや露よ
かゝるもおもひゆる乃那

菊の紅ゐうつろひの
霜にうつろひを白
菊と見ゆるや二つと
三句中れと誰
て盛れりきをと
いまこそそうつりそて
一さひかわ人とみハ
盛見るまきるを
けきをこそわやの
女の心かろきを知く
女の歌れ也ておなせね
あるめ去くこれも侍
人目れ隠をまもり
てかよひんとすれとも
見侍らかひつかさ

ゑし
いまこそそうつりてみし菊乃いろ
かゝるいろをも誰かみるへき

人乃むすめをいと思ひてかよひ侍
るをはしきをみておやのよ
こめられハ九月ある菊乃ころほ
かきしける
あるめきくこれもわひぬる人やなる
いつか霞なれおもはんとすらん

まさ待つと待たる女のもとに志ね

深かんとふ心を長
まの心かまさりけり
くよめるなし
おもしくハ君こそ乃
雙池山城にてさ花
名ハ君と言かひく
こそとし
かけろふのわのやき
童蒙抄云蜻蛉（カゲロフ）とハ是さ
とうり乃ちきさやする
あれまの日よ人のけ
あるのゝやさにわのやく
せさと昇の心ハわのゝま
ろハ男女とさ事也
ゆのうそもやすれよ乃

へしと云ハ乃れハ夜すまよ去や
えねりしと云カけまてえまゐる
おもしくハ君ともいの池ふこう
男をあけ川よも人乃いさいぬ
女りはゝしくる
かけろふ乃かのやきつれハ夕乃なれ乃
男のよの子乃男を云ふつる
かへし
かのこくもやすれよそと吟うふ
ゆしらりこう去まかまうしらえ

わの人あてりも己小
こひくやすれと昇け
いねそりてこそぬ
むさて同列ねやまよ
せまり去事も
あふそうろの事に
近江を命えとえ
て琵琶湖の云ハ海わめ
おけまハあふとふ
りろの去るんをえる
ハかく見るすゝき
るとりて恨んとと
何ふさうのせきとゆる
あふそうんとハお
山をりけらんと親よ

せきうこ去えくはゝりしゐるを
ちて母待く世ハし待られハえ逢
待ちて
源善よしの朝臣（参議舒男 昌泰三四将）
あふそうろの去る人へぬえてり
みるめあまさもゆふくうらん
かへし
何ふさうの世きとやしてかゆれハ
春澄（ハルスミノ）善縄朝臣の女（善縄（ヨシナハ）貞観二参議十二薨）
あふそうんりても去つまてと
女乃とよはゝしくる
よし乃朝臣

ちるらおくみられハ後
るのすゞもすくなし
行ひとの山志てこの
口訣の多し云ひの趣は
心をせきかぬるとぞ
こきりなハ切なる
也古今集五一にも
然共五首あり集
ら五首とのへんとそ
重てハわくるまや
あまれてこきら山あ
云ひの切なる由八集れ
こもこきりしもえ
すわちりもとし
あかきなをりかハ

行ひとを乃山志てこの木かくれて
こきりこころをせきそかねける
あつ　よみ人志らす

これくこきり山なハつきそ
めかもえゆるそとりころけ
人乃とわかてきくはかり
ゝる　ゆらく

あかき乃あのしよの八志てはれ
おきくわひきわれせまりや
あつ　讀人ふ知

暁のつくハおき別る
侍さハ行く袖を
とし露ハ都きミの綢道
おきてゆくひとの空を
人の心ハいくそしも
志てすれ我ころえう
き別よ心清しとも
かくはし世をや
古今雑上の哥しける
尾上よそえる松あり
あくにそ集まえハ
遊の志きしもく年
かる歌をしるも
しのもの松といひて
松ハかりつねハ年て

おきてゆくひとのこゝろをしるし露の
わきころかれそおりひきしねれ
女乃とりかとこかてはせを
やはくさんる所乃とりみるすを
いひはかりされれそ

よのもの松とひつとをつく
かきりねいりときのハさのかん

人乃むすかれとふ志のいつ
かよひ侍るを（はらく制せしけるし）おやきつけく
いとてくいひくれハかわくつゝ

もえかゝりしときき
なほおもひきらんとくし
風をいたみくゆる煙乃
上句ハ彼歌のことく
いひし故立出得りして
とをよみしたるハ是
こりすまてきる事も
「それもわかきまり
心ハおきところし
きみかねまつ乃
暗部山山櫻と見る
はるゝ気味のね
うらみする事也
みけてさ下るハ心明
なるへし

もしくる　はまゆき
風をいたみくゆる煙乃たちいてても
なをこりすまのうらそこひしき
はしめて女のもとにつかはしける
よみ人しらす
「そねもわかきまりなきこゝろかな
雨ねふりとゝきく人をしるらん
さいしつゝも
きみかねよそふ乃山れ代（イよふこと）まさす
いつまてはしつまるこゝろなかるらん

こひしぬる夢路
ハ人をこひしぬる魂
夢路ハ必我魂乃
ハ人乃もとにかよふ
事なれともかひなき
てかなはさるをいひ
かく歎きも恨也
あまりかひなくと
以下此歌の義なる
ところなるへし
かゝり火によりねさひ
鵜舟乃篝火なとさ
う河に浮てゆれ
さもなきこひのいそ
涙の河に浮てもゆ

せうそこかよはしける女まうゝる
おそまりりきて待られハ
こひしぬる夢路にかよふ魂の
あまりかひなくうとき君かな
女かりはつかはしける
かゝり火にあらぬ我身のなそもかく
なみた乃川にうきてもゆらん
人乃しらふすからておもふは
はつかしける
鵜かひもと同ハまとのねよ嵐く

らんとこひを也
まうへくるか今宵
一夜ハ何かね我身の
なかなかくとまと
待くるゝと月ハすゝの
露ハゆうんと待くるを
月ハ恋しく覚えく逢
是ハ経きハつくるす
うらく茎の根ハ恋き
抱し玉の緒ハ命乃
す事て経きる事を云
もりかゝる夢の上に
夢ハもくゆき抱かる
りくおさしくまくて
きまれとえて書事よ

あふ事もしなと玉のをすん
大江千里まうかよひける女を
といひわかれてことゝきさに二
まうかへてことゝいへせくなう
侍りす成よそりけし女といひ侍て
ねつる夜乃夢に見うてきさ（千里ゆりきてと也）
まとゝ見てくれハ心のいひつゝ（ゆかまる隣りぬ枕も向かつるを云）
そうる
もくなかる夢乃もるゝにしれくれて
うつりまゐる身とやなからん

さてかまへく心よ
ちくかく同よつらえ
すゝしす墓夢な忘
よつきを現す覆（下ク）る題
なとさわり等閑
ことゝふく恋し
めくるさく古くさよ
すくらの室
おもひね乃夢と
思ひねとり見て夢
とつかつひてやまん
抱をはり中くに
まことハ古かみそとさ
さやうに悔かておく
いかとつきぬなき人の

かくてはつれなかりけれハ千里
見侍くなくをさわりゆめとよ
まとひるんかへかまうてこけど
心ちなやましくておもへる
ことわりいひをくりて侍れハ
かさねくはりつける
おもひね乃夢とはくもやすからし
中くなみく何ことを云かりん
やもめのかりに侍ける時乃家乃（忠房之）
すけ藤原清秀かむすめとなむ

やとつましさるハ宮
かくわかるさし
のえられハ絹り
切くうき心をえんハ
しろん第とのいひ
こひておんねをとし
宿に帰りて　大和に帰り
女のことを聞てし
いつのねになきき
いつかおりんと云て
大和に帰りつるすを
鹿乃声をひけ
よめりトるハなのむ
すめの心りけりてお
みかりうまりとの人の

りんこちもりておかやけす
にありておろかなる京より
のぼりく待たるおとうこの
むすめ素性法師（古今集乃作者也）よりむかへられ
てまかりけれハ宿に帰りて
ねくなる忠房朝臣（おほん）
いけしかのねになきかこかりとし
の人乃あさちハいろつきなる
せうるこはりけるる女の返す（真実をつくもおもしとも）
ままめやかにもしるとひ

浅茅のうらひハ
あらハれてく
よめるなり
ひきまゆ乃ひとつにてさ
繭蚕籠に二つこもる
八同しまゆに二の
二つこもりするを云
桑こきにまうて
こきたれてなくとよ
めるし桑こきたれ
てハ嘆きたれてと同
心女の真実に請
らと云く深きこ
ころさしをみせばやと
せきさ山乃みねの杉村

て侍りけれを
ひきまゆ乃かくふたこもりせまほしみ
くはこきたれてなくを見せばや
ある人乃むすめにかよひける
をあねよりはじめていひ侍れ
こきりさりけれハ三（サン）にあたる女
まつりける　よみひとりもて
せきさ山乃みねの杉村すきゆけと
あふみをなほそはるけかりける
朝忠朝臣ひさしうおとせて

奥山ハ多生坂之序意
姉より袖めてハふひ
かくるゆけと紅あひ
りくさらく
なすひ出て書はれ行
常よハ宝書出てく
みとかひ出て書つれ給
御座さうるすえしこゝ
すこゝふる心ハ何す
あるなんとこのし乃
詞おほしけり
まつるまね物かる
立うすゝみハさすぎよ
し愛ひくの中ハ夢
のこゝちすとそ

文をこせく待くれハ
なすひ出く書はれ行る山ひとの
こゝへりこぬこゝろあまちり
いとせのひとくまするおりきて
まつるまねねぢうして立つすゝふ
うつりもわつねふちの分とる

かへし

うつりもあらぬころハ男のもれや
見くくもえりかさ物をこへて
うつまされつ太待ぐるよ

うつりもわつねふ心を
男子中乃見ぐくしえ
りあまき物云ひすれハゆ
めのごとくあるをと
なきからすく云ひ合の
語のく云へと云けり
太宰余（ウツーチ）の方を離やる
空し入日と共に小の空
きみすゝ名乃いるよ
或物云又乃信名
立てくも若しくる
ぬれりの我男なり
ハ領しまつせん
物をとせ（愚案おかしみ）かぐよう
人とハ一向乃あ人をいふ

ほとりくる　小野道風朝臣
かきわおくなすいハ旦日のよしにのく
みつ乃やま入をあのめやるか那

女房乃ここま　恵慶朝臣
きみすゝ名乃内をとのあきさ男とわ世ハ
おかしようひとりとこて見ぬりや

かへし　女房乃ここ
くしぬるとも見れハあらいぬる白雪の
いとおかしようりおもはしける

こしねるもこれハいのちねる　詩人玉屑　山雲絶縷連と賈島が作しに同し
心乃上るし雲ハように有りゆく物なれハおかしよう人といえんさめの序
寿もとひはるまも一向乃よき人ハ我をかりの〳〵うすとあるへし

くふうくなれさうめやハ
此哥大和物語よは於る
乃りし又ゆくふ宗
こハくめてにハるてを
いなし又今よ引つり
こそこそれハつてをと
よわる和乃船し心を
くふくても著るきる
ハ著ハりておかんと云
とりまる一日のへこそ
も惜くきハ人の心

弘徽殿別當　小野宮太政大臣實頼公女なり

みをつけのりきしめてあひ
てほりつくる　はつくもの船居

くふうへりくれさうめやハと云とも
こゝねハひとのこゝろまかそか
みちかせ母ひくまうしてきたる
よおやまてはそてせいしれハ
流れつくる　太浦

乃智ひぬるおかとし
いとかくてやみぬるかハ
舩舟の志かのまへ
わつらはるしうく
おりてやむ牢の侘
しきたに志りまた
そんとのみとく
いてうくまちきほし
おりてくわし袖の
ひるまし白波乃
あまりハ風のねと
と大浪の拾六殺餘
波立物されハし
あまくらハ袖のぬれん
ぬおまけしきる居

いとかくてやみぬるかにとおもひつれ
ひとめ乃あまりともきみをみてしが

太浦
（太浦乃ちとりのまうしてききたる）
（太浦哥ら合のかけ乃）
よ待さかくれハかかてみのはる
につうつくる　湖居船居

てはうつらちせやかまて白波乃
あまりよ袖乃ひるときもなし

かへし　太浦

あまりくも袖乃ぬるる乃人まつ波の
ぬおおまけをみてねこゝろを

心にとかんとさしつゝふ
袖のぬれしとのすふ
いまそしかくすとこ
ちりひしも花の宍
文よ陌りしと誓ひ
と花の心のあさかり
ぬりいまけて逢も
すましきとい誓乃
罰に死ねとも君かさ
めやハ物しかも命
それハこの何をや
あさもめまて川とも
雅俊女子見川とも
こりみよこきの噺を
さてし芦の根の

小野好古

よしあしの名にたちまわりと
ちかひをしつゝ又乃ほとまつる（誓言し）
さしもる　花乃ゐし
ちりひくも花の小るいけねとし
よろこめ物ききのちあるねとし
出のひくまかそれいあをさか（大輔かや）
それを　みちかせ　道風
あさもめり川ともきに芦のねの
よみらくて陌くるわひしさ（大輔よみをたりんとて花めのゆきしし）
梅ひらんとてまちわかれと

八重のこしらきとい
そん桃河も逢さるゝ
もちて君のまるお
文の信かりしとく
かくるへきらても覚をと
袖んくるくさ
わひるさ悔し見ハ
まやそかねと見し
時のころや
あさ川いこる瀬
そハ花風ふかく
のちきさる逢ぬ
あるいし心ハ君ハいら
あるも瀬わゆりしら
此方乃手尾も見

さきさらしむねさる傳か
それハたやかかわとひいそし
傳えハ
かへるへきらても花わすると河
いまかわるなさせあるまん
かへし　太輔
あさハ川いあるせもかかりそん
こてあるみかもあやしかりしと
大輔かこしもりしかりける

敦忠朝臣

えらくて侍りき
また同所乃ほとりて　いけみ乃いひ出ること乃くるしさかたけれハ
まうしとの池　みこもりなからとしそへにける
けみ乃いひ出る
みこもりハ水路といひつくろひてめれの千年
ふるてと池乃いひてひけくる筆とよめるし

後撰和歌集巻第十三

恋哥五

ふみつかはしける　業平朝臣
いせ乃うミにあそふあまともなりにしか〇〇
波かきわけてみるめかつかん
かへし　伊勢
おほろけ乃あまやハかつくいせ乃うミの
なみたかきうらにおふるみるめを
つれなくみえし侍りける人に
よみひとしらす

いせ乃うミにあそふ
あまともなりにしかハあるまし
もしほ乃ほしみるめハ
海松和布をおほひける
まりての字也　本云此
哥枇杷左大臣哥也證
本如此非書写之誤此
集之習如此之義多
有之撰者之誤歟之
いおほろけ乃あまやハ
大かた乃重ハ和布を
みる目ハえかつきま
しきの心をかく
よめるなるへし

はかなしとやいひそて
志て露ハいそうさへ
なきさ心をくとさえ
悩心ある渡し難き
人の身ハ一向つまと
いひ果やせん人の悩
心ぐるしきにも逢
らねさ身にハあまりと
思ふけれとものぞ
あらゆる人の心も
難面き人の心もみな
らちせも物んを存
命ハこころも及ぶへ
きまりいのちも命を
れハえん果かしきか

はかなしとやいひそてましきつ露の
人のこころをきしとおもふべ
読しらず
あらくへは人のこころもみゆるへきかり
露のいのちをしらずありける
小町かあね
ひとりねるときは待るる鳥のねも
まれにあふ夜はわびしかりける
女のうらみをせく待れはつ
かりける
ふかやふ

悲しきとも人は心弱き
ま我身を切つきと嘆く
事なり
ひとりねるときは待
独寝には明るを待
る故鳥の初も待るを
まれに逢夜は明るを
惜るゆへ鳥のねを
きらし
うつせみのむなしき
からになるまでも忘る
ましき我とはよ
物んとの心
いつまてか乃こりのさき
心さしにて見ゆる

うつせみのむなしきからになるまでも
わすれんとおもふ我ならなくに
何さあるなくをはひしかて心さ
しはあまとみてあまの釣さりそ
志くあらしくれはほかりける
よみ人志らず
いつまてく乃いうさきん人乃ことのえる
こころの秋かせをまつらん
とい志らず
うきねの夢さうかちあるかなしと

人これハ云をハなの
ことにやうすれと秋の
こゝろきる雨ふれハと
の秋風吹て露の
落もかゝらんと思を
かくよみたるなし
こゝろねのゆめかけり
うきねの露の
わか乃身ならんとも
ちりき秋のよそろ
とひあかせしよとも
秋のよれ草のとさし
心ハし
いふならはゝるさきまさる
りやたりける

秋乃夜をよつゝおもひはかるかな
安乃とさしはまつかくるらん　躬恒
門をたゝくおけさへちられハまつ
里かすてはつまゝはかり
なる

兼輔朝臣

秋乃よれ草のとさし乃わひしきハ
何くれとあけぬ物にそありける

返し　　よみ人しらす

いふならはゝるさまさる秋の夜の
草乃とさしにさはるへしやハ

いふは付くはつき
おとゝはこんと思ひて
草の扉にさはりし
と宮し浅き故なり
さりけれとも
人之れぬと物思ふ
秋の草むら乃露志
けしきとやすらねと
志のひするなりひ
八雲抄云しのひさハ
ひとへともいふそしねの
乃きすふすさて又
よかれてもね秋
又ハ賤機（ハタ）くるれ
よるやうの物也と

宇多内親王家　宮乃かた女

かつ乃みつゝすみかよる物ハ
よそかれことおもひ草葉にねのみなき
ありけれハ　さらにかすめて

貞数　清和御子

人之れぬと物思ふ比乃袖のうへそ
秋乃草むらよそそかれも
志のひする人はしらるゝ

猶大路大臣

志のひねにおもひそれて秋の夜の
何それハ志つもあかなきつる
せうとかハりしくれとも

されハひとくよ云ひ
訳て詠めせしとし
何ろかなさるべきと儀を
まるおかねさし殊よ
色つき中なと云ふハ今
とも妻女とし何ろかも
何るを今まて男乃
色ねをすとも女の眼と
をちすハ乃ちへハ雑句
量藤物云蓮葉家お裏（うら）
日貝付とえてよか
俳案物云山寺ととも
見よとてそれを尺
出よる人おり家本ハ
どろうよ安き説よ付

おもしろかりけるむすこをこれ
かれがひよそれどひさうくいと何（らうへのへをまやあひよなやとりを）
のれさるやとうしみれハ（つつえしさもられハイ）
よそ人含つそ
あちすん乃うへハほれるきさうしまこう
その何うかひハつくとりするれ
おとこ乃つらうおわゆく比るのふ
まろれハ流りける
みかやめハおとこふ見てねうつるの
きしくそのるき世をとのむりる

てまらすむもしきろわ下暑又云大納言本云笠紙ぬしりれとか
師流の本乃えすみてねるるえ乃やうき拠し但定家の流儀ふ任せて
そけるのやとふ有蓮家を用ゆへし心ハ蓮家の上へつまつくりはと
あるてらしふハ貝乃付としくうひ色ハ中あいりともうハ雑句よあ
をぬ氣あしく人のらひさつくまハ物あうひしくこうあるへ入れハ
まる何ハねりわうハさるハおやしまきるよのもろしもし心とやさき違
みかやめハおとくかえてね八尺流物云くと池と同愚案序寺し題跋れと
いふきらつとしておれかまきしすりやめハ雅ひくきゆるしそれをつひけて
かうつくしのをけ事さ男乃心そよの子わるえら事さ心を寄よ寄るとも

男乃ときまろりて見和くそ
ほりうける

あいての子何よく女の良
色後乃名を色まり
ひよせてしおりんとそ
またき人め志けれハ
おりそのに遠街編

おとこの子何まさ乃意をもかつるる
入めの志けきさつ何ふさうりきろく

なるを疑ふ心し
うひくうぞ行かぬる
すそはかへらひくるさ
そし人をまち世へをと
男の心を占ねん人と
今ひつるいるさよ
よしよふへねとハ偶儒
媼女はまたる世へども
覚ゆるをするは問
ねふるけハ人わくへ寄り
女を移る寄孩とね
なるけハ今なわけるも
今まる女の心かりの世
かれ浦へわれどるよ我

女乃嫉ふかくしかなかりけり
ひとりよかへらとすときもていゐ
日ともち流りけれる
夜ひくかへる何思へるものを行の
よりへねそのしおもひける卿
女乃心かわりぬるをきてつかりける
ねまかけハ人わくへありそれしけ乃
よりへねなるかわねとこりん
又ほかりける女乃おやのハ世かりわ
（名れ北ィ）名れハおもにはかわなるよつかりける

かりとこひけりてや
らんとらるやし人笑（ヒトワラヘ）
いせのあまときけり
しハ明空も上白衛
保務乃寄ときち人寒かく
寄まきけ日まるめける
ぜりとし我なえてよりと
の心を涙行かよよそれを
寄くハみけそふ
我母ひやするうちを
けるる執ハそもあれハ
此氣をうつやまえん
てらくさせるも
かけられハしもの
かや乃氣これにてく
やまをひそ寄きまり

いせ乃あまときまけりてかあハおもしくハ
こひしきかとりけるめかりせよ
一条かとらり空をちんこひしきとハ
ひよやきしかわれハとふ乃るときき
てやまて　一条　貞平親王女
こひしくハかげをだにみてなくさめよ
わかうちとけてしのふかほなり
返し　　保縁（ハイ）
かげ見れハいとゞこゝろぞまどはるゝ（恋のこかれ）
ちかゝらぬけ乃うときなりけり

此にて是を見人ハ心さま
哥のうへにもちかる
かくね姫にもうちそひ
き執の心思ふべし
此二首皆女よりの哥
にて婦首の中此哥
ひとりは心慈の哥な
まハ此郎にやさし
人とのうきをしのび給を
我むかしハ人の上乃う
きことしるとあかりし
たん向る頭をハせたまひ
しかハむかしの乃
男をかはりてきえ
わらきすかまつ郷

人乃むすめにしのびかよひ侍
りけるをはらからげにえしられけれハせうそこ
をくる迚よめり

よみ人志らず

人しと乃うきをも志のびとあかり女
むかしなりの乃わか男さしもの郎
見まれるる女に物いひとひてすのわ
さわされてこゝろハしまふらがれ
なれハ流りけるる
かしきことるきをすてはもたて

是別る心を郎さの
あきしふうて弦を
交未と懐（すゐ）く と隠
はねわらも心さうか
初枕の後朝れハ
おきうきうす洞さ
へうみりを露さへ
りるまことよめり切き
うらわくるも嘆
露の餘情なるも
さる宮君乃あかき宿き
宮君乃暁の別の
うきをさうてすハ君
園中よとうしせん
やさし殿ハ（帝）園也

こゑんよそにもきゝてわくるか郷
人乃こよなきためてやすらかでは
とめて流りける
ほねわりをおきうかつる行あき
露さへてるその身ひとつにあたるる
思ひてまできける人乃君のハ（日比思ひてきたりし人）
くよふもくる衣すそてはと
めて流りける
まて君乃なかりきおきをおもひすハ
きみのよのは後れせやしや

とひくる人乃こゝろ
するを見えれとも
霜をかね春よりの花
あやめハ長高く詠ハ
うつろひたれハ霜よ
よ堅きれハ雪霜乃
うき故のこと縁といふ
も縁かりすへし
いせ乃うミのあまれ
あま乃まてかる 僻案
抄に清浦 奥義抄
に河中のまくかさに（さに花くさ）
ひか寧花妙成大綱云
乃本うもゆすてかを
あま優成ての説

ゐし

霜をかね春よりのちハあやめかて
いつのまにうつよのれせかうし（さひのあかりこともすまし）
心かハあらく久しくとハさわるる
人乃ことにつかりける

源英明（ヒデアキラ）朝臣 中将 斉世親王子 母菅家女

いせ乃うミあまれゆてかいよあり
あまくてりける男をうらむる（わらわ物さひさしき）
えかうと待りける女乃家におくり
まつかけるとみえていつへいく

海らうミに蛤と申物
沙中にはまくりの住
あるを見付て海余
忍まて花をさしれ
ほるをはやもすと
詠たる忠基後らし
きと申 略注 東案

ことひ出て待られハ
藤原さねよ 忠相 秀世
あふさか乃関のへこそ我ハゆく
男をおもり名かりおもひつゝ

序寄し心も何ゆるとはしまりて名くこそすかるうき男の
あかくをうらむといへんとて上句ハよめり 恨ても海藻の縁し
あふさかの関のへそう えうさき女のいてゆきと向ひてあふ
坂乃ゑ野へ行と著る心 交野ハ河内 下るハ我身ハあふ乃
難きと野と同しあをひきくの野よりゆきと上るを
ことそわしてると
君かあろわやねよ
安綾山八尾二六尾張

題しらす よみ人も

君かあるかやかねよりみえつる安綾山

玉葉集詞書には河をこ
或おとこ君にかくれぬと
ようにえさへきこえては
えりましとこし書家が
言ハおもふ人と云て
東路まうる人の別れさ
き歌きこを読しきや
おもふてふこのハ宗
子とハいふかなりゆき
ここ忠宗とかけてうき抱
とおもすもゆらし男の
心歌にまえれとおもへい
へいはうらねとの心
おもふとこそうれ
世人の口まねは皆字

うちこしゆんぞもちかく
おとこのみちまは流れうしる
さこ　傀子（大和物語にも在）（或刀自子大江玉淵女）

おもふてふことのはいかになつかしな
のちうきものとおもはすもかな
さいたうを　兵衛（兼茂朝臣のむすめ）

さみてぬらこそうけまこれ行乃
よまゐる人乃いそねるけまえ
よみひとしらす
ふらんと我をこめしとのちぶそ

とハいかゞすられハ歌を
くさしの心ハ呉竹ハ
よゝといはん枕詞に
ふらんと我をこめし
もゝのみか詞の末と
けぬ歌きしこのちぶと
ほかに万葉とよめ
ほすてもさしくるつる
如く消ゆる我消えと
しくきしハ君あれ
いしとの心露ハそく
こゝは縁りて読也
このちぶこそ霜枯
目にみかし詞も読る
かくて久しくとハ根

わすれなといはゞあはまし
おとこのやまひしわつらひて
まかりて久しくありてつかはしける
いまはとてもきえぞしぬべき露乃身ハ
そらへきやどのあまはなかなか
かへし
ことのはもみな霜枯れになりゆくハ
露のやどりもあらしとぞ思ふ
うけてそこせく結るゝ人ゆゑ
かへすことなり

そのよする白露を
ちくさに置は散めらし
ちさも枯れハ露のや
とらもおもしとて
わすれんといひしる花
ありとこそみの筆
三んとハいもねよいそ
今とりもの乃疑ア乃
やうにいひて恨ふる
この心なるへし
うつふハうつせとおれも
ものゝ名をハおのゝま
逢見るとはいひて也
二三条もしたる説也
ハおもハれも又

わすれんといひしごとにハゆかりけるに
いかはかりかいおもふらめや（いふなりし）（来し）
弱き（一本こゝに）
うつせかしかせとねまきをまきの方
きのふ乃ゆめをいつかわすれん
女子流かりける
ゆらるまてよせくる浦をとこ
よりあさしとも見つゝわすれめ
（雅子内親王 承平二年十二月廿五日卜定）
西四條乃斎宮まだみこにおはしまし
あひし時心さしおもひてふかく

夢にも見てねたにはよく
忘れかたき心なりや
詩關雎ニ求之不得寤
寐思服悠哉悠哉輾
轉反側ニ此詞かるらん
ゆらるまてよせくる汀
我を忘て女をまつる
寄するや深くすゝみつゝ
浦しと見て浪かなれ
かく深きさひかる物を
とし古今藤井てまき
潮やハさりく山河の淺
き瀬よこそそにいハ
こそゆらるゝハ淺瀬
いせの海のちひろの浜

拾へるかひを秋萩にさしておくり
またなかれハそのあるかひもなかり
梛乃枝にさしてちらせおくる
あつさ乃朝臣
いせ乃海のちひろれはまにひろふとも
今ハなにてふかひかあるへき
あさより乃朝臣のとしころせうそこ
かよハし侍りける女乃もとよりわれ（幸院の兵衛）（定國のむすめ）
いまハおもひわすれねといひ侍りて（三れもとも）
久しうなりにけれハこと女まかひ

安芸のゆゐかれハ伊
勢の海としてふかきより
求むとも今ひ侍し
こし貝をうてし出
大和物語ニ八今ひとつ
甲和ゆゐとて侍り
わか出行といひしま
我忘れぬへとおもふに
きみハてる君それ
それハあれとも
まかせつるとも
そらく別とも我ハ
三るかきにも君ハ云
もかくれハ風わ
みよ我をとふよの

はきゝくせうるこもせなとふかう（イせきりくれハ）
くれハ　本院乃くら（イ蔵）
わすれねといひしにかなふ君なれと
とはぬハつらきものにそ有ける
さいきつゝも　よみひとも
まかせ手もなくちてわるとも
風よりかゝりつれかさふへき
かへし　伊勢
めにみえて風ハこゝろをさくへき
やらそかすみ乃わかれこそせね

何しといふ事
めにみえてね風の心をと
こも風に我心をさくへ
やるとも只霞こそ吹
わかれの我心とハえ見す
知めにしきと風に
ハ霞の吹ひらるれた
かくてかりそめん
此哥ハ深乃源き事
帰ゆハわか煙霧の
袖にも君かよりこんと
いふ心や土左か清
息にかく貞孫
細こしける也
松山乃すゑこそ波乃

土左かもとにせうそこ侍ける返
事はつかしりける　（貞元仁和皇子イ閑院のこと）
さきとのこと
わすれなんと松乃えにおくるハ
うすき袖にもなみハよせてん
かへし　土左
松山乃すゑこそ波乃えにしあれ
きみか袖にハあとしもとめし
女乃ともかきとめなき心かわ
そことしりけれハ

末の松山乃波こゑて
こハ心乃かはるをいふを
以ハ松のえだにかゝれハ
波はよせてんとよめる
を彼松山の波によせ
ってさやにかゝる孫
ふかきハ君か袖ハ涙
もそゝすかりさき中
とゝまりてせめくし
かくいふすめ川と
哥かくいふすめし
こひし河の来れる
かはかるすはわれハ
宮ゐさやとハいふそ
人をのみうらむる

贈太政大臣　時平公

なくさめ川といひしこの家ハ
いつか秋かせをきくちかねる
おもふ乃心かはるかきこゑれ（これ此男の心のかはるをうらみし時女よりよめる哥）
ハよまりける時此男のこゝろ
さかえけるあふきをまかせけ
て侍る　　よみ人しらず
人をのみうらむるよりはこゝろから
これいまさらにはなさとおもはん
ちのひとる女乃ことをよせうらし

袖中抄云昔ハ扇を
今とらするをいむこ
とそてまそれなし
とハ後鈔する之大和
後拾三条太大臣女の忌を
とまり扇をかへすよまれハゆかしとそいひける今かひはなしらきを
これよさひよせてん男記在りける多　愚案扇ハ夏用られて秋風たけハ捨らる
哥とす班婕妤（ハンシヨウヨ）が怨歌行（エンカカウ）にありさやのことで男女の中よそざるを忌死
此哥の心ハ男の心乃かはるのことを恨むよりハ此扇といひてうけ我心をさためへとし
おもひきの山ちさて序哥しまれくかくしとハいゆるところのかく同
流ぶしまりぬんと
流れてハ川来ともし
かくしのしハ御字也
わひつゝるときさへ扇の
かへされて侍き

流かつらりぬれハ
おもひきの山ちさしけくゆくおの乃
おられくかくしともしられん

おもひわすれ侍まなれハ
伊勢
わひつゝるときさへ扇のかへしきを

此さへ此ことに云へきは
此男の何乃情を知る義
なきこと也っきは云
きこし伊勢物語乃様へ
なるやうにいうし此き
るす教なきわてもす
なりけり云つと書
いなせともいひなされと
奥義ある云せとは謡する心
之日本紀よりしたる方辞
に諸を志うとよおか辞
とも志りもいれえます
まつとよめり
こすやはんきやせん
門前の松といひけ
て待心のうさをいひ

いつとしのふこころなからん
おやのまほりゐる女をいはせ（いやしもしきとも）
ざもいひなしてとやられは
いなせともいひなされすうきに袖
男をこころをもせね世なりけり
おもこころのいはまうえなくてこねす（えまうねるすをいふおもひはいふとも）
といひて侍れはよみ人しつるを
こすやはんきやせんとの手川まての
まけのこころをおもひやらん
とあれとおりに男の出ておりたれは

やれとて
しめてゆくこまれおし
古今にもとはれそ
しゆうらん志ぬてゆく
路の是かれおの棚橋
これを本字にて
昔人はおよ橋をてか
く出行人をとても
に我君はかけまし
とくめんよもすと
俄に云ふへし
とりをこていけるかひ
不肖乃我生らひも
なきにあやねもとも
しるまつとて久しくてん

しぬくゆくこまれおし袖たるまに
なとわかやとうりわるきのまらん
袖のひ侍たる人の名しうをとつれ
さりたるか（辛の字をやくとそてうし）わくしくまうてきなり
たるまなりうえしうとどかれは（いそ久しうえさかりとさ）
とりをかくいけるかひなき我男とは
なふりえ人りあおとしまん
いとしのひくかうてきわたる（女の歌 きうりうとかうや）
男をせいしたる人おわたりのく
しりたれは此りかわてつかりたる

えんさりしとも
あさりするときゝ
ねすみさりするをはさ
まことは申せは我か
にあり浦人ゝしられぬ
この漁（スナドリ）されハ今さら
むれハ我か女の歌を
かゝふ志られとて制
せる歌よ此て読出
あらめて人中川よ谷の
よことなめいそことなく
ゆきさるるをいひて
公軌の上の女の事ふ
のこゆるとえさせ
人ちゝのみかゝさハ

おさりする事さうわひしき人志れぬを
あふもろうしりすまのよ我かハ
（称公軌贈中納言廣嗣妻）
公頼朝臣
（後妻し）

のこゆのわかれハ
寛湛法師母
（中納言公軌室）
あらめて人中川よひ乃よそことより
いかゝへさらゆきかへるらん

無ひさる人よ　よそ人志つるを
人ことの手ゝるこさハあふもある
（芦のうへ荻のうへとおもひ）
はのうしあれうし手はへしな
志のひくかよひ待ゝる人とかわて
兼輔

無ひてくる人の志わさ
の程をさかりけるを
うら手てよめる歌也
おほやけのつかひよせの事ニ
兼輔ハいせ乃斎宮へ勅使
まて下りて呉竹の世を
の歌とかゝれとよみ
ありて大和物語勅
撰集よみくいはすや
人をしる心の中をそれ
人を偽らぬる心の底を
清き渚とハ伊勢の海
を云侍て京よ帰り
しらぬかふわれか命を
長濱ハ伊勢とハ云おい

（やそてんとも）
あさしよのあさきくおほやけの使
ひとり伊勢乃海よりかへりて帰る
またてきく久志うとつとも侍る
それを
少将内侍
人をしるこゝろのくまハしらねとも
きよきなきさをいかてすきけん
かへし
兼輔朝臣
しらすめりわまたいのちをあつのみの
うしろやすさを志つゝかハこし
女のこゝろはかりける

ばかりなるさにあらん
とおもふらん我命もたえ
くと云涙は絶なき
されはよみける心なき
名をきゝはへらんと云
世をしおもひとかなしみ
河の淵はたえすなかれ
る瀬知すらきこえし
世のうへにかゝらぬなと
知られしぬらの名を
淵をもひとかなし
淵なりとなして（モヒ）名を
かならすしるしわする
いはゆる淵とかなし
られんとすなし

よみ人しらす

せきもあへすみちのくのふかき河
わたるせなきをなかれぬるかな

かへし

淵あらはひとなみ〳〵しもよそとも
まことはあふさき瀬名こそなけれ（イせもこそはあれ）（てイ）
はねかりはてゝきかへしぬとかや人の
いまはあすかてこよ人をもうらみそいふも（またうし）（うきくらき名立ると）
ことひかくるゝ佳なれは
きくかする名をの子らへ何かしる秋

きてかくるゝ名とのみ
月日も心とけまし年
無きわいにやまきか
たる名のみ立し別よ
ねをのこそいふす
をはかしきまそれ
かく前の縁下結紙を
世しけれの花かも
しかねもはにひえん
しかねは年ねて中
豹にいはむえんと
河原にて名されは涓
川流名と附と讀
銘ともその縁絶
いまもいや子やまを

たえゆふひとのこゝろさけねと
左大臣（実氏公）河原りいてあひ侍り
くれは　内侍さいけに　平季
しかねもあふおもひ人あら河
あれかしせもかへるまのを
大瀬にはけりける
左大臣
いまもいや子やまと出くる郷云
けらの年こゝゑをわすれすさらせよ

かへし

けちかきハ氣ち近き
也郭公よ大備を
うへくよきの也
人ハいさ子やまかれ乃
人乃心ゐるくされハ人
のうすハ志つとも我を
侭思ねかハこゐ事すと
也子やまかと出てとよね
あれよ蓋でくけひく
かきさ心をりてるも
あをしふうつり梅を
今までもうつりのハ代
上ふハ何のすとも別よ
つきとふすも何るよ
しきるすを又あかねそ

人ハいさ子やまかれ乃かくしきさと
あしハねさとくもすみうつるへし
左大臣より侍りける
中務
あるしなふうつり梅を何子すくく
いつこよりうつる侍しさあらん（ところイ）
季縄女
右近よりつかはしける
右大臣　師輔公
おもひ侘君か侍しきましちよりそ
あるも人目とはしさけしらん

つきさハうつよふる
侍るさうとし
おもひ侘君か侍しきを
侍しき人よハよわかさ
けまてとひ侘ぬれハ
近よる事きよ末れ末の
あとしねやうよ人目

西宮左大臣高明公
しのあきう乃鶴臣よ山子侍りつるとて
とこく
よみ人しらず　或説兼輔卿女
笛竹乃きよそれみるねハりくるしも
そのよくにそあるみすも何しらん

そをゆするとし人めをとすとハ人目をつきてうきうをも立るを
いきむ侍しきさを本まうて思やうちする心よよとうけ音うつも泰乃
始皇泰山よ上りて御の風雨よ松の下にあひを志のきこくて松を大夫に
封せらる史記りあり　或侍云侍しきさ連ぬる末の心にかよふ多さ宮
笛竹乃きよそれやかね　そのかみしハいとハ伊勢物語ゆよそのうくにあるよ
冬れハうとくあすもまうとある相し　玄音云離別也そのれくう世ふ
あるを云此哥の心ハ笛乃古音乃うつるすわかるやうよいとしう心ハくるる
とし離別しくそのれくう世ハあはされとしまたにあするも笛竹の梅さ

をとれめり　中将内侍え
やもえてもらずてめる
八重ぬれおゐぬれきさね
あきらきし二閨三ニ
絶毋乃かくむすめに
あきらをわかせく
蜑乃ぬれ衣とうけ
し事とこと葉ほふ
あきらのぬれ衣の洞さ
らく千另かく書せと
みかしぬ人のきせる
みくらぬ人ハ彼とと
出とりふゝも見舞を
大よろてともあそ
とやのてかゝんとし

こと葉にみてきこてうとめみれ
内侍乃かとへ待たれハ

参議小野好古
よしみるの翁

めもえてもあそてるの葉み志くるれを
男乃ぬれきぬそひるまきもなし

かへし
中将内侍　好古本妻

みかしぬ人乃きせん（きるイ）ぬれきぬも
増すひりあへもいまりつきさあん
こいきかて

小野好風

おかしきハ瀬とふかけしての川

こふ人旅乃ぬれきぬハ
さの閨の雨にぬれて
雑もあらしと独をと
ゆるさぬ思あし
おかしきハ瀬とふかけ
川の上そ笑る瀬
とも別とうけて淀
め人の心の深きをとう
別とハ新むくれなき
別とてもこの子やハ
年に一度七夕の渡ると
同じ締の逢瀬いさ
とひ別とても難瀬と
男のあるんことも知も
波の守もつまさかなり

みきらろをみちとくみあん
かへし　よみ人しらず

別とてもとめ子やハするての川
こたひとひわるてふ瀬を
みつけまのへうまはうらし
くる

清蔭
きよかげの翁

男乃あんこともちとくらくらく舟ハ
あさ乃こともはまさかなり
こといてきくのちよ

時平公女
京極乃御息

雨よきたる　ことよりの子を

こハけしからぬ足係
きゞひよ見え上へもあか
下乃見る八御する人
の心も情まりしこゝろを舟よりて読之
侘ぬれハいまはおなし御出よりとゆきてとハ宣旨云是ハ宇多乃
帝の后生母より従院悲不了世ひとしかもひとあるの郡れてなをまるを
家語云侘ぬれハとハ元良乃はらわてやるかよきうなきうへと云しされハ今ハあれ
すとも云へ名ハおなし名よみれ身をはくしてもおりんとさてと云う
身をはくしてとハ難波の極之まの浅緑をきつんかさめてきそくさま之
此哥ハ幽玄妹の哥とぞ　愚案　難波の氷尾串ハ清和の御代よ始て云と
三代實録よ見へたり
父乃左大臣　或本ニ敦忠
の父時平公とす誤し
是ハ御匣殿別當の父
小野宮右大臣實頼公也

わびぬれハいまはたおなし何ハなる
身をはくしても何りんとぞ思ふ

しのひくちくけふのへさうよ
おひかゝるときさて父の左大臣の
せいし待られハ　敦忠朝臣

敦忠ハ時平公延喜九
年薨卅九于時敦忠
五歳なりしをこのこと
いかにもかくおもふ
此一言をよく直り
途てはかりきこと
まろもよにいさといふす
冥穴乃中よれハさと
ひ死出の山をも我
いさとさそひもハ君
一人かへるとまさかし
とし大和物語よ見ゆる
とにいつといいつて
志ての山すとハ一人
こえんとハせし

いかばかりおもひてふせるとよ
ひとはてあつくきさんよかさん
公敦朝臣乃むすめよ忍ひて徃侍り
なるまわりてみつかはしく志めてと
とかくれハはらりける

あさた乃朝臣

まろもにいさといふすハしての山
こゆともこさん梅のしるよ
としよくかへぶ人乃つれ
あくの子待られハうつろひぞる

かくハかゝるきよきなれ
我習ひハかく深く
侍るやと推じとか
る君が声それとはく
むとくる萬代ふみよ
てよめるなるべし
或抄云鶴ひなの君か名
を萬代とよまんとき
わすでさへや心ゆかね
かやうちかくまでハ
よせられハなとて声
きこゆんとなり
見えてさへや心もゆか
すと言ふなるべし

萬代はくらく佐かりける
　きみうけ乃鶴の
かくハかゝる山かきよりもうつろ心を
あきと君きく乃声とけきあん
人乃とふすかひかりなる
かとよちの子かへしらまほかるう
きくすゝれ乃とふひよせ
ていでさへや心ゆかねといひ
ききかれハよ子ひとしらす
いさやまた人乃心も志らはゆめ

いさやまた人乃心を
かすでさへや心ゆかねと
いふは猶く心やまる
君が心も志られね奥
またもあまくはへけら
ねくも此袖の子ね
きこと
まる志かの子ちるう
よる汲のハなみる究
をとこうん枕頭に亀を
こ波ことゝひかけくか
てこも此の縁に心を
亀寄るもたてゆると
さハなみるも心をそ
とかり

おくまもとみえも袖の子ひかり
人乃よとりきかわかるへとおりて
の子かへし待られハ子ちかりひ
はかりける
　浦
まる志かの子ちるうきも物もをを
ゆかてと声こりかへりとさへ
人をおもひかけくいひかけら
侍るをまちことよのく侍り
　くれハ
数ならぬ身ハ山乃はにあらねとも

寐られぬ身ハ山のはに、
山乃端ハ月の出る所也
さハねられぬ身ハ今よ
もちいられて待つの
月日を待まもの井よ
くとりまさるも侍
とやう
よのなかはなかりて侍る
なりんとハよのなか侍
うて身のゆゑ侍るもの
こゝにすみしも心を気を
なからいふれとも
夜むすの声にくゆふ
童蒙抄二夜の衣なり
花つる言葉を出

（イ月日）おほかたの月をすぐしはべるかな
ひさしうひさしう侍まつれる
くるを待れハあかひとの朝臣
（古今和歌集但平直有）よのなかハかはりてさふらふいつもかわに
こゝろねこゝろをひとはしらすん
かへし　伊勢
夜むすの声にくゆふなまひとゐ
こゝろねのみとこそれかりえさるらん
めてますせぬ人ゝはかりける
よみ人しらすて

こゝハ本文青蛾拂燭ヲと
そり　愚案山彦といふ事
まうでてうちハ他よりも
まよふ人の声をこたへね
すむ地をいふ事を
ともあそひ所にて
やすらかに只止との意
うちわひてよはゝん
山彦ハ響んとこ人の
難有てさまとなす
もちまきよわかく達
やまひこのこゑのまゝ
山彦の声の中にまよひ
ゆくハ虚言まことし
かくるものとの事也

うちわびてよばはん声に山びこの
こたへぬやまハあらじとぞおもふ
ぬし
やまひこのこゑのかぎりくどいても
むなしきさうしにゆきやらん
かくばかりつれなきものとしりせば
まうき身の待りたれハ
ゆくへ見えしなきせハうつせみの
むなしきねをやなきくらさん
よみ人しらずとて

そもはまをりて年
ふる恋の頃より侍ま
しきみやこに路く也
あれ出るなみさの河乃
近江乃海と連身こ
うけて東を乱む也
あまれとかはねくそ
ふひを火よりて
胴の袖の心ふかく
此ハあやしきと也
くみとてめくる
つき前なる也
露もかねさん袖の
かしぬる袖の只々火
ふひのすくらき故也

あれ出るなみさの河の此ゆくすゑも
洗ぬりつつのとそとのまん
あの日人りはりつしなる
あまをとふつれとぬるくわか袖乃
かはるおもひりかえりぬやなう

かへし

露もかねさん袖乃くもりぬを
きよりおもひ乃わかやすくなき
女乃をとりすのかつかなるよを
りかへしかれハ色よりほかしなる

はねかわしまふふく
まこをを近江に路う
うつくしよめまるや
おりてハ出るさハれ
まもふくらうれと

ぬまはまりくると
文びきのなきに
くぬ糸とハきれやを
き麻糸のすく月衣
あすもさかしとなる
とえしきとふ文
さしなきハなる糸乃
きれなるやとこ
かすみぬ身ハうき草

はねかわしまふくうかつりはる
おふみちとあきやとよりはし
あまりも行りしをまて（ますてに）きくゑ
ぬすりらすしなる男の内わ（若乃かつさをかるとくし）
わるもとく女乃りてかれを
あんまのわすきぬるといひかれハ
此まはくもくるをえしハ夜川乃
てひきうりくねいとをやえなん
人りわすまくつ侍るるとき
かすくねゑ身ハうき草と成なん

うき人に教よへてき
ぬる男ハよるへもある
まぬ男とかり異え
こそ捨るべきや
夕やみハみちも見えねど
童蒙抄云駒に縦を
こハ韓子曰桓公孤竹
を伐春ゆきて冬還
迷ひて道を失ふ管
仲曰老馬乃智用ゆへ
し則馬を放て去る
ぐひくゆりぬと云
こまにこそまかせたり
心とまかりと云ひ
つまハ駒に任せてなれを

はまなき人乃よるへきまし

おもひわすれなる人乃もとに
まかりて

夕やみハみちも見えねどふる里を
もとこしこまにまかせてそくる

かへし

こまにこそまかせたりけれあやなくも
心乃くる（大江氏）とおもひけるかな

朝綱乃朝臣乃女に文おこせつゝ
はしけるをこと女にいひつきて

しらとしは此二首大和
物語にハちゝめのうき
兼國近江守家のきゝ
こおり
いかりまことゝ悟て
姫めハ我に文を遣
りことはいつりまことを
つやかてとへく急
も歸る中とする
うとく居ハ文をつ男
てやましたるなれハ
ゆあとへまきく（まき）
へらひ深くふ示
まみとふゆ（まさ）よ
今はへおりてハ遙

久しうありて秋とふらひ侍り（ちゝめのつかはしける女のもとへ）
けれは

いつりまことを洗くやかて居かね乃
あふことをまれりいまそあるらん

おとこ乃れきてねきこと男とお
ひさりて侍るにこゝのおとこの
あつまへまかりけるを聞てよめる

ゆまとへまきくへき物を逢坂乃
せきのあなたそはるけかりける

かへし

まへにて此事を述

せきもり乃おく事は関守のなつる事とハこと男をおひ出すを云

童蒙抄云鶏（にはとり）に木綿（ゆふ）付て出す後のあるより木綿付鳥とハいひそめたるよし

ゆきくるまてはきぬ関守のおくしまると云を陳したる事也

ゆきゆきてもきけ過る関もこしとの心

こと人の隔るとハきけとおもとるへきとハ怪ま

せきもり乃あくしらるて逢坂乃
ゆふはけとりハなきつてそゆく

まさ女乃はゝうしろ

ゆきくるまてもきみあんあふ坂乃
せきもりかれる人をはかりやと

かへし

こゝる人乃隔るとハきけとあふさかの
せきもらぬまのみさへる
かれありあるおとこ乃つかひ出ておて
きく掛をいひくかりて

きけハわせきめくきやうもあくせんさすとの心あり

かつらきやくめちとは席斉ゝ葛城の久米路の岩橋ハ一言主の神半（ナカバ）にてかけすして只中く此てことふらんさをみすしぬゆきて別めくゆそあるつき掛うつりて心ある下し中さてくる人も一度中絶て人あれを今も知れぬとの心

志ら雲乃千々に一むら

かつらきやくめちにわたす岩橋の
なかなかにてもかへりぬる御

かへし

中たえてくる人もなきかつらきの
くめち乃橋ハいまもあやうし

志るきさぬこともきこゆる女ともを
乃あつまり月何ぞさに待たるを
見くあるよいひわつこもとくつ
かりける　在原有ぬ

志ら雲乃千々に一むらにみえしのと

白き衣を着きて
あらをかくしみく
雪にハ立出ると頃の
孫あれハ中にえ分
て戻を当卸との空
ようられこ心えりけハ
物を火よかられハ切る
く放心をひく袖
のひらるき事とうく
よめるく
わらひのきゆるまも
こひを火よ文へ歌をと
来まうてし
きしとの身をゆる
岸火かてもこりるし

しら雪くきえをおひうめてき
妻乃をとりにたちける
よみ人志らすと
あまれと心えりわきりけるを
あまのおもひりかそのさるらん
といちてしも
わかこひのきゆるましらて若きハ
あそぬあけきやましわるらん
かへし
きしすのくるとゆるといひハとんそれと

事まうて来くへ
こそねくも臣れか
たくきしねといひを
のでる哥まるてし
うらの身をうつまよ
よまわつりよをうつる
よをゆる妓を火のよ
もそこまいてられと
よこてうえへかり
あるといひろんと云返
川との身わするとも
川との身わするとそ
我おをわうかまう
立よつね心きもし
見さくかいかまさ

男もこうれぬるよのまうまるる
又なをと
うかりの身をうつすまとゆるかや火乃
よりもしうこそおもひこかれし
又返し
川との身わするをとみえなかくさて
くるしきこころいやかまそわする
まそれとと
みゆまるくちの身なく我とゆまよ
うれきせんとせしとやする

おもく立ぬるよとおもふ歎き乃そうしさのとまさるとも
あまさるこゝちの千川この千わくるといふりはけしくみまさる
心ちのごとくとよわりみまさる川ハわくるきおそれハ我と
いとひのまふゆへ川ともわかちかくの千おもハまつさあ成ゑ也
まふまとゝの心りやすかるゝゐる哥あるべし

何ふことゝよくよ何わ
遊ぞう乃よとゝもと
いひけてしみつ乃
もりハ山城の淀よ
并立森とてうゝを
見つるといゝん枕詞
よ置じ八雲御抄も
見ほ乃杜淀まく
こけり為家抄にも
同し或説名のあると
いふ義不用
見ほ乃もりをるゝけれ
霖雨の森と漏（モル）ゝ
あの雨よ涙こゝきハ
理（コトハリ）られハ人恨ず我も

後撰和歌集巻第十四

恋哥六

人乃ととよ流りけるを
よみ人志らす

何ふことをよしにおまてふみつのもり
浅しと人を見はるこゝろかる

かへし

見ほ乃もりとるこゝろ乃あさのそく六（ろイ）
うしそもあへとよゝの川も千
みほりしやてきくよもすり

君を慕ねあつめす
れハその恨みとし
うき世とハ心の紛る
浮世の方をすゝりる
いぬハとよ妬めねす
されハ心ひのらす
ろ何ふ我の隙ふつ
らく等つゝとし
うらむれとこは事を
よそにハ一世の
わけさとみ也
うらむともこふる
空わたり逢（又）嫁わ
ぬる人を恨むも寡
いかよふあるハ知

おもひ結ぶるまゝにわれもまたおけ
結ぶれハすなハちかゝりて
うき世とハ抑も紛るゝけまれとの
行ふるハほしきさ也わすゝしろ
女乃もとりはらつしるゝ
うらむれとこふれと君かよそに
しつすかなくはなきあつるらん
かへし
うらむともこふとていかにしやぬらん
つれなき人をうらみしてるへき

へきしつすと云て雑言也
しのふふへつる事を
僻案抄云しのふるハ
こらへるよしを云
心の中にわするゝ事なく
とい也　或抄云しの
ふへつる事くハ
心にわすれて月日
経る事といふ也
へはるかうすく遠し
そわれるをいふく
のうちハ隔てある也
隔き中ハ絶さると
もいひつへし　古説也

いひかつしひとしやみなるゝ人は
久しうあまたく又はかりしたる
しのふるにへはる事とありしての乃
しぬる身とハおもひさるらん
かへし
へはるかうすくありふしつゝの
糸をしくともかひやあらん
おもし乃やさくまてすまするを
の千しられハ人やいかみてるんとて
くることハ隔ねるすゝむ

くることハつひにあるまじけれども
それもえしどもおろか
ら乃縁し常ハその身
まゝすとも染む心ハ縁
すくれハ人目をもお
もひまよふとの恋
むかしよりそのめくる男
執めて来る日の稔を
とても守の縁しなるハ
かひなけれハ忠けく
あひさんとて
いふへ乃心なるや
古我を思ひし心ハ今
かくありしみやとも
いふへもつゆおそろの

そのみハうしとおもひゆるさる
かへし（縁どと云心なり）
むかしよりそのめくる日乃稔ハおれと
こしくまくハかひなかりけり
おとこ乃くへしう若気さかれハ
いふへ乃心ハなくやなかりなん
そのめくるのさらく変する
ぬし
いふへハいかにもこゝろ乃若気なら
うきなをもしるくうらみとのそする

古の恋ハふかくやありしと
思ふを思ふかくらけて
なとも今も我ハ心なき
やらん君かつらきとも云ひ
去りて年へてあるとも
こゝろもむかしに
替らんされしそのみき
へもうく思ひし人の今
ハおほかりしても年よりて
ぬるをとかくゆるしも
年ころひさしうなる
二とせやかのとこゝろ
縁く久しうなきては
あかつきの空
わすれてとふやる里の

男乃しつかりたるおかしハつかりおそし（すまへわかちそ）
きくるが拙かひくのちハひとよわわ
（はしとを）ふかくれとまくこさかれハ
（すゝら）こゝろもむかしにかへてうき橋を
ふまハわすとてをとりのみきく
ひとわさく二とせやかもとせず
あかりたる男乃ふ月ハかはかまて
きゝく年ころひさしうなかつるを
といひくまかりたるま
わすまさくさやかる里乃郭公

忘てれぬくらしなる也
されハ中〳〵ほてなる者
はれせぬくもおもひは
よ一声ハきゝつれとも
まちやらく秋なき有
声ハかくもれぬや此後
思ハよ秋なき有まで
かなしくも声なきとき人
かくわがまつひとを
乃ぞあるへし
露乃いのちハいかでも志らね
ハかなき露命此河渚
ゆきも志らね世よ情あ
くはしとのことぞと
心得べくそうそく

あきくひとこゑあきもくゆらん

よい志らず

まちやらく秋なきさやとよきまちなれど（こす）
こひしきことら志る人ありける

（つれなき人よありけるに）
おもひ侘く女乃もとよつかハしける（ひやかす）
露乃いのちハいつとも志らぬ世の中よ
なとかつらしとおもひをかるゝ

女乃かへり待るゝとこそみえて
ゆる人も待てさわかれハ心ばかりうらみ（男の心乃をかり）
（まその心）ぐらいてひて侍るほどのよまれける

も露の踏むる也
かくも人乃こゝろねる鹿ハ
鹿ハ秋入りおハぬゆ
よのさと狩されハ我
あはけれもかりよけり
印南野ハ播磨之地
なきけひのねなとよむ
とし給えへるるや
と山里のことなるに
山里のこゝハ秋のなかぞ
鹿なる物なれともこれな
らねハ我中ハ踏まり
きゝハなともせねとて
鹿かなかれとも
なかりさ なく也

かくも人乃こゝろねる志かハいつよ吉野より
はつゝくのみこゑはるゝまぬしられ
志のひさる女乃もとよつかハしけるゆと
さも世ねとやしかされハ

右大臣　九条

とやまさ乃みちなくかくにかくいかゞ
あふれうめてハきえんとのみ
おもこ乃まふてこぞあるかして
身をわするよわが笠をこゝひよつかハ
しらされハこれひとの翁の女つかハ（立返）

月まちたゆきつれと
あそよ府様乃我云かよ
我乃心し愚案月まちた
待わひ夜さむくこゝは
人それハらんや為我よ
まちきともりやる我
まちきぬらんと
歌く心ゑるへし
かすひつかまるひ神ぬ
愚案いゑて縁するをる
同心何やまま知世まきこ
あすの川乃心を
世乃中ハ何か常なる
飛鳥川きのふ乃淵ぞ今
日ハ瀬となる 今

月まちたゆきつれと かずへてるとぬれハ（ミえれハイ）
為もようごとなかゆるかる
きぬめく人ハはゆかつれる
よミ人志らず

かすひはかるらひすやぬ我こひを
松むしころりきてせてっ郷
いひわつひとやまるゝぞ又お
もひ出ゝ子つひ待くれいさこめ
あきゝかるとひとくあすの川
乃心をいひはゆりて待くれそ

あすの川心のうちらり
流れハ帰られハみさ立
てかやあまらり為
帰られハきひてさり
やさかよりとむ
まあわすとこ
ゆか乃ねをよう我
心の
きるうきさひとう
其ハ貫之評ハ去す
あきき嫌を何ものく
浮世をつくす富士乃山
ことくなん山羽まく
きるうきさひとう
きくとよやるまやか

あすの川心乃うちらりあのるれそ
うき乃きゝみいつかよまん
おもひけさる女乃をとこり
（翁我去岩藤清二条太大臣一男）
あさかの翁

ゆか乃ねをよう我きしやまハるる
おもひりもゆるゝみわあなけ里
ぬし よミ人志らず
きるまきさひとうきくかつのね
かゝとハゝ乃子のかあるまん
いひおそしる界のおやゆとれそ

ことわりハかこつけまし
ちぎる乃ちかひも空事
婦との事とかこつけ給ふ
男らんともの思ひ
といふ志るしもなけれハ
よのつねなるへし
ひさしてさかゐるなる
池乃井樋をさしとめ
てなをとゝむるを云
ひとく歌乃制し
手ときくかれは
とゝめきかりんか又
我をとゝめりんかう
りてさ寄縁とし
志られぬわれの今生なぬ

せいしとと呼て女のうひきしなる
いひさしくとかゝる我池なる乃
其身ハ川くさり おもひすけん
おもしあり侍るる人乃心ふ心侍り
それとハいふくしのひるるをいかなる
わすれのあるらんあるかよりなき
てねかかれる（ぞふみても）
しられなわかひとしれぬころもて
きみをおもひ乃中よりもゆとをを（そう）
心さしとハおもれとさへど人めかなさん

心さしハ心を移くし我
今忘れぬ心りよ君を云
乃火をもゆるも今まて
泣ねハ志るまでなきし
あふ夜ハりてのを
君か雑面さまあらん
さらわれて月日
かす遠なるを今日を
つゝみて人目まけ
てのみ信しさせし
拝よ猫の目をかくる
その縁よそよめるし
業平身にハなるまじ
別是ハ移りて心底く成拙なくさハなそうし別る底き業平の縁て
いふかくことかくらん 思ひくよなけきの志てなきて中まれハいひ

はしむといひし侍されハ
あふ方のありての后かる我こひそ
人めりかるこそ乃わひしき
野志しも

業平身ハあるもわかきめり
うちきこえそけすもなきん
いふにくことかくらんかきす
あけき乃こゝろもけふかなし

言ひちらりんとしも
下に鳴子知らずして
よめるなり
おもひはては ふかき身を
年中は稚き列る物也
二ひつの手へなる者を
さるくまく物さひ乃思
が列なるも立ちき
人の列はせてと思う
小ぬかる身なるや
我なしね人すみの江に
我の侍んと云ひに我
なしね人の住てなぬき
心をは住江難波の瀬見
こひはてるなり

おもひはてつまるところをさるへきそ
おもはれぬるみのところなかりける

文なしはいつも女乃こと男に付
侍よりたる小姓たる源との小（京島作整 秦瑶善子）
我なしね人すみ乃江のきしに出くる
なかそのみるさうし身はらの那

整
さの小かれてたなか待はれはし
めくきる道をはかりとくして
よみ人しらす

ふらゆしるは八新乃見しいこゑ

ふらゆしるは
芦中のふ江には芦乃
咲そうつる新のま
ふ江に浊るなそ
新も見ねは芦中よ
ふ江を月をとりそ
も見すとひく道
をとらめすて見せと
心を隠し我よよめる也
すかしやみつ見の里
菅原伏見大和名所
よ隠れゆくしかと
よそよりは家にも
中程へせさいと穏
ちそやかる御し

おしかゝるふ江をとめくも見えめ

菅原乃（家イ 世麻の作ともいふ）おかいまうちきみ乃家へ侍り
たる女にかよひ侍りける時よみて中さ
てつかはしける

すかしやみつ見の里乃あれまくも
かよひし人乃あともなき

女乃おとこへつかはさすとて
いつおもしろくなかりける

ちそやかる神もあしね我中乃
色ぬかるはなかもゆかりける

此神ハ鳴雷とよめるを
ふてし中のへさまは
そらんとしてよむ也
ちはやぶるかみなりはう
かゝ人をへたてらす
志わさハうたかひりこ
すハとこへのれ雷なれ
こハまことの神と偽
らるゝの恋こそ絶まし
我中をも神も
はらくくかのつらんとなるへし
うき志つみちちせはけりく
まもまるくかひさりくよわき
さるをといひやる心なりや
かゝり人の細りとりて

ゐし

ちはやぶるかみもあまくたらん
そのまゝ雲ゐまよ人をとらへ浮く
女こゝろにあつよりなりて
うき志つみちちせまさりく心あまの
そらものゝのりおしとそふ

我ゝまき恋うき恋し身をやつれし心
詫名れ劉郎ハ深泥子是乃へとおきおか
みはらちゝみはらちらひかり人の細りとりて
うひかり人乃細りとさて

田舎といふ女ありし
又ハうらとハ又河内
といふ本も何かとのふ
往きるやそれを李六
みハやちりひと出て
けるとかや
松山の波こえき書か
ご心ハ我まこする人ゑ
おもしを松山乃波こ
ゆるときさしハらめ
しまるのよのやし我
より娘ハ浪の様と
さしてらをさひし抱と
婦笠をさして来と
とさひしよさしまりか

藤原杜文（モリフン）

松山の波こえきさこゆる
我よりこゆる人ハおしまを
おとこ乃こゝろあふるゝ色くさと
やわらくよひとれとこゝろかれへ
よみ人志らすて
さしこそとおもひし物を身かさ山
うひなく恋れとかまよふる娘
くし
とるめの身もあまさこゆれハ三笠山

しよしの心をうひま
くゐのとゝると請合也
とるやの女あまりこゆれえ
うちにかゝる人間の
何ほどとこゆる指を知
ありかハりそ笑させて
ゆんとさるめい多く
孫さして八三笑の種之
あくさむることの楽ふ
今も無死る人命ある
をそひまひうきのとも
落まりけとてめくまく
とし露ハ本望まよ
うるを孫まれよかり
人もれさとわりよおれ

志るくいくさうくゆくへさき
女乃ことよわいとつくまきひとひ
うとうのめをこせく待くれハ
あくさむることのえにさまかうらすハ
いかもけねつきき露乃いのちを
まとよりのそこ氏名うふす子待
乃るけとこんとうのめくこすあ
にくれと　兵衛　兼茂朝臣女
人もれをわりよねられぬおもひ乃
月うりさへこうあさむりれくまも

有明の月まさへとほま
さを待へし兄の今こん
さうあしとまちくく哉
てあさむきうるまま
身さいろんとそて月
も孫ふ満ち出さる風
情るよも彼素性の
うらのさうひよや
立田川ちらぬ兄ち
立田川ハちらぬハ乃
枕詞磐瀬（いはせ）森ハへえ
し乃枕詞皆大和
乃名所し口明し
うよみ野ハ天すやら
宇陀郡耳無山皆大和

志のひく待待るゝ人乃をとわり
めるくもき人うりまととふわけ
きれハ　元方

立田川もちあんきちりる名をわみ
世の乃らわのいそしさうおもふ
（稜牧云西京土御門ハ東辻ハ東洞院西と）
宇多院ニ待るゝ人ニせうそこつか
つくる事めすみも待さわれを
よみ人志らしも

うべ乃野ハ天すら山りよふと会
よふうりさへこくへさまん

これハ会せておち宮
陀野とよひ宇多院よ
時てこ再すり山すれハ
きらてこゝへ忍ふ事も
そよの乃山をのするも
嗅子るハまの袍の時
かねねをはよきれ
むとの心こゝろうあれね
人まつ鹿のさ迹あるや
こひわひてしねてふ
宣信らくなれるよふ
すハ世のこあきに我
意あく世のあれに
かつんとの心
かけみれハ物らへねる

依子内親王宮母女房貞子昇大納言女
宇多院の女なりしころ

むかし
みよしの乃山あらしすもよふけとり
あふりハきりんとききかさねねを
はれねして待る人あり

ところね
こひわひてしねてふことハかなしさゝふ
世乃さめしまもありねへきかな
よるよるよるよ女まけくいわ
それハきりなる よそひとしらす
かけみれハおちへねる（けう）きみよわり

これハ此人ハ夫ハもとも
かのくる親をされに
思ひの文にまゐよ
同の忠のをハいひても
こゝをさかし時ふ
始めてもあさかし時さ
ふこゝいくと見う
名まりふえとよゝて逢
し人は又えわかね歌き
をよめる
あかすて枕のうへよ
ゆめちしをまを夢
ゆとひをて語に
何そて覚て別し夢
ゆをみるゆのおわれとそ

ありのあきこの乃ことへいとうん
あひりくる女のみかハりさわくれい
こゝさかし時すふこそしあふ塩を
あといまたに我まとふらん

女乃こゝろふかきわりめて あさ
くり

春宮先坊入目時
かけとも
藤原基房女
相模守博文子

あかすして枕乃うへよわかれにし
ゆめちをみをしらへてしるる
かとしの乃とりもまかせれハ
よそ人さへも

なにもせよとかりもゆく
逢かたきよりハ云なり
らむ人ハ声もせよと成
ゆく歌をよみかけ書
もせよとありもゆくらむと
皆鈴乃縁也
こしねてふ名をふる縁か
こねうてふ名を立
させの千鳥根こそ
迎分きようらんと我か
りふれとふりくるらん
と云鈴乃縁也
わかきめよか門ハつしと
かいつしと見えたと云
けて本とこるまゝ

なにもせよとかりもゆくらむ鈴鹿山
こゆるふもとのちよくらはし

かへし

こしねてふ名をなうけすりやま
はらからくあらんとおもふを
女よ招かんとくきぬらんと
ことは人よ招ひのれはうかく
わかきめよか門ハつしとみやまあ
このさゝこゝえねかるらひせし

かへし

てかつくしとみゆる
人よろまこかられハ
みやうの悪ハすれども
あやしき男とハ
逢難き男と知
あるし其くし歌き
こうつむハよきさうり
かえとし何とあやしき悪
するハよきうすあけれハ
よしくさやうの悪志
まあきこし（アユ）風家打云
桁すけ木（尋）斧也
はさらにに露ん
悪しとのこ露なる也
やらかつてはしき

あやしき男とハ云るく悪すて
あけきこうかはむ人えよきうて
人よきしるかいせん法し戒師
はさらにふ露ハすけも人こふる
わかこよの悪世ハうつもかくして
さく招ひろる人乃おもかくさ
山つゆしらかれとちりうへおも
すまく　よみ人しらす
やらくてはしきとうるハけれも
うきハよのうこひしきかれ

近きころはしきハう
きみしこちうきを
おやもほうもあさ
乃わかるまきわえ
好播磨も志ゆ乃人を
はくるるをひうめ阿
染河苑ねし一念をひ
うめてハよきむ時
多くふかく妙をきさん
心を阿乃強猿まさ讃道
わたてハほとふる
伊勢猿猴子染河を
國乃人々乃いうてえ
ふるまゐるてふるまの
あるん ば心まてわ

女乃ともりはかうしくる

萩原さねて（ちゝ乃真恵乃大臣恒伝子）

はくしあるおすひろめほうまうかるを
あやまさしんよきむとまさるく

かへし　よみ人志らず

わかくハほうまあるて深阿の（廿めイ）
ころはしくりあともこうすれ
おとろ乃ともわ花さうゐまね
うんとひとこさかんれを（人イ）
花さりかすくし君ハつうれと

うかてハ他くさて
好色よ妙をとりかと
よわりなるハさや
のほさんはほりざつ
うきやらんとし
花さりかすくし君ハ
花國よことゝつ
らさハ一向根もせ
しとこと眼をを
さくらすやとと
て此らの繋るを見
するとて花をぬ人
は繋をふとする也
とふるをまつよ月日
ふやと待よ月日を

こよの繋をさへかつやをせん
おとこ乃ひとしうさそさわれハ

右近

とふとをまいよ月日にゆきの
いろりやいて今ハうしろん
ほひきのく待たる人乃をとり
冬うすのしさわられハわすれさ
（春流れ来る人の心を何とはうきし）
ほをのよれさひしハとふるを
ひ流のうしわられハ

よみ人しらず

こゆれハその也小余（コエ）
綾被相模し漸かる
やり恨みそて
わすれなき名をもゆかし
ゆかしきハつまりき
せし忘草これ名も
つまりなれハ生る
なハりからうやゆく
よしきらし
うきこよの志けき
餘うきよ忘草種そ
ある秋の信さると
かす志つねおもひハ
我数志つねさひそ
民まよろあるをよみ

わすれなき名をもゆかしみかゝるても
かるてはやともゆかしくらかん（浊）
あり
うきこよの志けき宿にハ忘れ草
種くさりかて（浩）秋のあはれしき
女とかりとらに信かく
かす志つねおもひハ君にある物を
ときところちきさ心ちこそすれ
あり
ときところちきさかとし ゆつまハ

とろうにある心の
ときあちきさからを
るいかよの曲し
ときあちきさひし
ときあるきさひろハ
我もしちやそとき
よりしその心きも
わりなくきるこう
思ひ心さし乃うすき
をおもふもみえおる
へき袖を我ならく
思ひきるこうそれ
いよくゆらすうめん
とかくかるやし
落ちい夜衣はし

我よりつらしとかしおもひよ
元良親王（武子ハ陽成第三）ハ夜のさうろくし志
てうれとしてうわかる
南院式部卿のむすめ（三十三弁 貞保親王清和第七）式女
わりなくもきるこうけき夜衣
おもふこころをとさと
久しうとそさわかる人のおもひ
もくこよひそらんとして（まそこすイ）
かひまてとやてこさわかれハ
よみ人志らすと

やへむくらしけれるやとを
古今とも文よふて年合
好むれともや淺く
門さしわてくゝ公家を本
尋ねるへし宿ハ頃之
人をいひわつらひく
人のはれるきよい佳
てうと女よ毎もるをも
さをしかの乃はまるき
こゝ人よいあひしれと
きしめの人よさひしる
かゝるよ小男鹿の聲る
きこよめりこゝ人を
其の乃小松乃時て
よめり心ハ頃し

やへむくらしけりともと見文よ
あみくやしくあけて待らん
人をいひわつらひくと人なひ
待く様いてあさきくんさしめ乃人よ
己ひ文まく引とへよくれい久いやを
志く扇よしるさこのりろかきてるよ

はなてきりける源廣明朝臣（ヒロアキラ）　中納言從二位　三品盛歌王子

さをしの乃はまるき恋をさの後この
おのくの乃こより きてしいれまん
たし
まみひよらす

さをしかの乃ゝ恋しきお
心ゆくしるかな小鹿書き
せまいはれともおそさの
えおハぬのこゝろす
強よ与てまて難き
わよめりからん物
とハかすよなるき
物とハ心すりとも
かよおる個れて
流そそやみしとも
まくとれ我見乃を
身ありと至てと又
る心ひかりや
こゝろましいかよ欲き

さをしかの乃ゝ恋しさのさこそまさりしハ
はかなきとき乃ねよこそあれ
おもふ人よえん遠待て与られよあれハ
其もかくともおもふ乃流を（ハヤ）
からんねともおもひやるせし
こゝろもて
流をそやみしとあのゝてあれは
しらせぬものを恋するる
（古今こゝれもあまのうきハ）
こゝろもはかるまき戻ハ与れ格子
ゆめちまさくやおひたくるらん

然れとも道理な
き身ハ果縁もなく
なすなるやん身は
いまた人をうらみ
世乃中のうきハ身にも
世のうきとても心ても
うらみすれハ身にそれハ
人の恨みもきるものに
ハ人を怨むと云恨み
るうき悪しき事と
夕されハ思ひかけさ
こんやうやハ来ぬこ
さうんの心をまて
いとされて世かうち
山ニ入る身もまへ

世乃中のうきハ身にもあるものを
よのむかしうつゝそれかある
よのめつる人り
夕されハおもひつきまつ人乃
こんやこぞや乃さとめなくれと
女はやくる　源よし乃朝臣
いとされくハかうちの山ハやまハ
いくねりふおもひする
さいきつも　よみ人し
人あそりあつね我身ハ難波なる

いとはれてゆりそるまハ
いつねるも宮ことゆり
来とろて白山と読
人あそりあつね我身ハ
数ならぬ身れ錦きく
芦の根の底に深きと
下にねるやと添て
白雲乃ゆきま山ハ
深雲の前ちへを見
む心を雲風の花さ
世乃中よあるを明の
世よあるゆかしせられね
身れはきまきさひよ
まよ数きを猶るや
河すの川せまれとてもる

あし乃ねのみきふかなるし
白雲乃ゆくまきやまハさてかなす
おりふしハ風そよ世なん
世乃中よあるを何まあけ乃月あって
やみりまよかをとそねつしる
さてまぬ心おもと女のうひれを
はかりしかる　贈太政大臣
河すの川せまくとてむするのなきそ
かちせりあるとあるのいとれん
久しうすのわかよつもと　業平朝臣　かの乃れハ十

ゑりせきとめ重ねゆく
我不定欲（フヂヤウヨク）とていふ奇妙の
三よはくえせんとおもひ
男をはじめてはなれどう
男をはじめえこハ我男を
つれ〳〵人の病をそへり
我心ありかねる時ハ男
の心されさるとき我
男の古ねぬるすと漢字
也とんやうしてきり
つけて初雪のふりぬ
うも氣とてふると
名されとも身のかぎ思
ところの花を常住
なくまはようそてるや

月かけに雪のすこしふりかかるは
よみ侍る　右近
男をはじめてはかれどもかく初雪に
かきぬるこそしられよいそまし
源のしたてあそんの朝臣十月ばかりに屏風
（正明参議兼大将　是忠親王子）
をかしてと侍れバよみて送り（おく）て
名されとも身のいまはねにはるきかれて（ねぐ）
むかへとるありこそいしりなり
女乃腰もやすみてふりのまへにゆかはわか
うかて待るに雪の深く降て待れハ

むかし宜乃字むき思
ならず念あるなし
はもえてある人の
垣根にきたる大和極
子常安輝同誓し
志て雪のけさハつもれる
白雪のハけさハ積れる
思ひとけらん能説お
そへる花て雪の様
し心あし
白ゆきの深き忘
心ゆし春子よ
思ひ仍ひ雪とほどう
ひそあれどもよめの
ちハし

はじめ女のむかへに車ばかりしたるせ
うそそくゑてはかりしたる
　かねすけの朝臣
志ら雪のけさハ積れる思ひかな
あはでふる夜のほどもへなくに
かへし　よみひとしらず
白ゆきの積るおもひもたのまれと
きゆるのちはあらしとおもへハ
心さし侍る女みやづかへし侍れハ逢
ことかたく侍るに雪の降るをみてよる

わかこひしき身の何なるを
こひしの人ハ那字し
こひをみなみて我こ
ひ乃きられね八雪とし
定りきえんとし
山のくれきしせね雪の
雪乃ねけりける心を
君を待かけるとろ
へてよめると
何しる男にとし入ふ
年のこゆるに金銀をこ
ゆるまいけて年ハ
くふ何をまこゆみれとも
我ハ君ふ金銀にそえて
わきるやと歌ニ

わかこひしき身の何をかたへられねとも
かる雪も今しりきゆん
かへし
山のくれきしせね雪乃わかしきとそ
君か行方えたりかまくうかる
物思ひ待くる女の身乃えての比わひ
ほとりしくる　萩原ときかる　時雨（トキフル）
何しる男にとしいりふ何すこえぬへし
あふさうやまをこえれやとされん